てんてんのらくがき

宮城まり子

てんてんの らくがき

定価 二百二十円
送料 三十円

昭和三十二年六月三十日 印刷
昭和三十二年七月 十日 発行

著作者 宮城(みやぎ)まり子
印刷者 伊藤定作
発行者 堀川豐弘
発行所 株式会社 明玄書房
東京都新宿区早稲田町四二
振替口座東京一四七五八三
電話 34)六九九七

装幀・カバー・扉・口絵・挿絵・カット 著者

印刷 新協印刷 製本 新栄社

んてんのらくがき

宮城まりこ

しかられて（童謡）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

かがみのまえ

あるステージ

まりこ

序

近藤日出造

宮城まり子君が、この本の序文を僕に書けという。気が小さいので僕に頼んだのだと思う。僕ならば、序文を書こうが、腕を組んで銀座を歩こうが、ヘンな噂は絶対立たない。序文を書けば「あいつおっちょこちょいだから、書かせろ書かせろと売込んだのだろう」と世間の人が思うだけだし、腕を組んで銀座を歩けば「まり子さん、足にケガでもしたのか」と思うだけだ。そこで小心な宮城まり子君は僕をえらんだというわけで……いやどうも、序文の序文が長すぎました。

僕が宮城君をひいきにするのは、宮城君が舞台のあの大胆な演技の裏に、女らしい小心さ臆病さを持ちすぎるほど持っているからである。何をくよくよ宮城のまり子、水の流れを気にかける……ああでもないこうでもない、どうしましょどうしたらいい……これが女の叙情というものでこのオロカさがない女などというものは、まったくの話存在理由がない、と僕は思っている。

女よ、オロカなれ、といっているのではない。宮城君のようなくよくよは要するに誠実さと何ものかえの恐れの現われなのであって、女の美点に数えるべきものだ。

「あのねセンセ、わての本にわての絵エ入れることになったんや、フフッ。笑う？　笑わないでね。そいでね、絵エ見てくれはる？　そう？　見てくれはる。うれし！　どうせ、下手な絵やけど、ほんとに笑わないでね。笑っちゃいや」

こんな電話が宮城君からかかってきた。やがて、彼女が現れた。

「絵をお見せ」

「…それがねセンセ、だめなの」

「だめとは？」

「あんまり下手なので、持って来なかった」

「なアんだい」

「すンません」

しょんぼりとこういって帰った宮城君から、また電話がかかってきた。

「すンませんセンセ。さっきね、ほんとは絵を持ってったの。だけどねえ、恥かしくて、どうし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

ても出せなかったの。すンません。ごめんなさい」

女のオロカな叙情とは、かようなものである。これが女のよさである。

かくてこの本が出上った。かくて僕は、内容をなんにも知らずに序文を書く。無責任だとおっしゃいますな。人間を知っていれば、書かれた内容を知らずして序文が書けるのである。宮城まり子という人間を知っているので、彼女が、誠実にまごころをこめて書いたということがわかる。そしてその行間には、女のオロカな叙情が流れていると察しられる。

宮城まり子君が、本職の文章屋、本職の画家でないからこそ、人間即この本の内容、この本の内容即その人間、といえる。つまり、僕が歌をうたえば、僕そのものが丸出しになるわけで・・・うっかり歌もうたえません。

序に寄せて

今東光

宮城まり子君は大阪平野に九つから十六まで住んで、大阪の空気を吸って育った。彼女の庶民性はこの時期にしみ込んだものと思ふ。

何故なら、日本中で大阪ほど町人意識すなはち庶民性の充満してゐるところはないからだ。この大衆性が人々に悦ばれるのだらう。

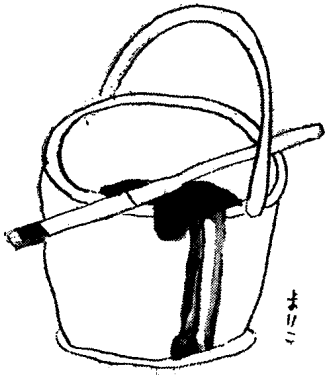
彼女と対談してゐるうちに、天台院の檀家になる約束が出来た。天台院は檀家を殖やさないことにしてゐるのだが、彼女の河内的性格は立派に天台院檀家としての資格を持ってゐると思ふので、喜んで檀家として迎へたい。憚りながらわが天台院の檀家は、谷崎潤一郎先生、川端康成、尾崎士郎の諸氏と共に宮城まり子君を加へて、益々光彩を放つだらう。

彼女は今後とも大いに歌ふだらう。歌って歌って歌ひまくるだらう。日本の憂欝や邪悪を吹き

とばすほど歌ってほしいものだ。

啞蟬の僕は彼女の歌で大いに精神を浄化されるから、日本人が彼女の歌で精神を昂揚されるなら幸である。

昭和丁酉夏六月誌す



目次

序……近藤日出造…八
序に寄せて……今東光…一〇
二十の瞳……二二
「お母さまァ」の祈り……二五
顔の自伝叙……二八
いい泥棒さんの話……三〇
夾竹桃……三五
私の男性観……三八
夢にみた東京……四一
アクセサリー……四四
欲望……四六

螢草……五〇
バウ少年……五三
故宮城まり子を偲ぶ座談会……五七
タンポポのハネ毛……六一
男の人……六四
くず屋の娘……六九
眠れない特技……七五
ミュージカルと犬……七八
エーンヤコラの歌……八一
セーラーとねんねこ……八四
本と私……八八
案山子の唄……九二
チューインガム……九七
葉鶏頭……九九
いつでもよろしいんですのよ……一〇一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c